

ポストマン

2008(平成20)年2月12日鑑賞〈角川映画試写室〉

★★★



監督＝今井和久／企画・製作総指揮＝長嶋一茂／出演＝長嶋一茂／北乃きい／小川光樹／原沙知絵／田山涼成／竹中直人／犬塚弘／谷啓／野際陽子／友情出演＝大塚寧々（ザナドゥー配給／2008年日本映画／111分）

……中国映画の名作『山の郵便配達』（99年）や、ケビン・コスナー主演の『ポストマン』（97年）と比肩しうる感動の郵便配達モノが、郵政民営化が実現した日本で、今やっと誕生！ 時代後れの「パタンコ」をこぐ長嶋一茂の姿にも注目だが、本来のテーマは家族の絆。1通の手紙がつなぐ人間の絆を大切に作るポストマンなればこそ、感動ストーリーをじっくりと味わおう。

第4章

ひとつとして同じ人生などない

なぜ、あの映画と同じタイトルに……？

試写室でよく一緒になる先輩のおじさんがこの映画を見た感想は、文部科学省推薦にふさわしいいい映画だが、なぜタイトルを『ポストマン』にしたのかに違和感があるというものだった。

この映画は、長嶋一茂扮する主人公の海江田龍兵が1通の手紙を配達することの意味にこだわり続ける中から生まれる感動作だが、郵便配達（員）をテーマにした映画は、時代こそ大きく異なるものの、中国にもハリウッドにもある。まず中国のそれは、霍建起（フォ・ジェンチイ）監督の名作『山の郵便配達』（99年）。重たいリュックを背負って、険しい山の道を歩いて郵便物を配っていく父親とその仕事を引き継ぐ息子、そして「次男坊」という名前の愛犬が織りなす、厳しくも美しい物語は、「これぞ感動作！」と誇れる名作だった（『シネマルーム1』56頁参照）。

他方、近未来の2013年。世界戦争後の荒廃し、無政府状態となったアメリカで「ポストマン」と名乗って手紙を各地に運ぶケビン・コスナー扮する主人公の権力に対抗する活躍を描いたハリウッド映画が『ポストマン』（97年）。このハリウッド映画をよく覚えていただけに、私もなぜ長嶋一茂を主人公とした家族の物語に『ポストマ

ン』というカタカナのタイトルをつけたのか大いに疑問。龍兵が愛用している郵便局用の赤い自転車をバタンコと呼ぶのだから、いっそ演歌風に、『バタンコ人生の唄』とでも名づけた方がかえってナウいのでは……？

郵政民営化の意義を、今1度……

主人公龍兵が勤めるのは、千葉県房総町にある郵便局。とはいっても、プレスシートによればこれは実在のものではなく、この映画用に漁村センターを改築してつくり上げたもの。この郵便局には、局長の玉井正一（田山涼成）以下ひとくせもふたくせもある職員たちがそろっているが、そのお客さまへのサービスぶりをみると、その実態は小泉改革によって実現した民営化された郵便局という雰囲気がいっぱい……。

道路特定財源の一般財源化が大きな政治的テーマとなっている昨今、郵政民営化に政治生命を賭け、2005年の9・11総選挙のバクチに打って出た小泉首相が掲げた「郵政民営化」の意義についても、この映画鑑賞を機に、今1度確認してみる必要があるのでは……？

こだわりはいいが、押しつけは……

この映画でお世辞にも演技がうまいとはいえない長嶋一茂が主役を務めたのは、彼が企画・製作総指揮をした映画だから、というわけではなく、彼が最もふさわしい役者だと判断されたため。つまり、ポストマン海江田龍兵は郵便配達の現場にこだわる昔気質の頑固な人間だから、あまり複雑で難しい演技は要求されないから長嶋一茂にピッタリ……？ そう言ってしまうと大変失礼だが、こんな頑固一徹のポストマン役なればこそ、長嶋一茂がお似合い……？

郵便物の仕分け方から配達方法まで、時代とともに変化、進歩していくのは当然だが、龍兵はあくまで昔の流儀にこだわるポストマン。バタンコが速いのかそれともバイクが速いのかは地理事情や交通事情によるだろうが、私の考え方は、便利で合理的な方法を選択するべしという単純なもの。しかしまあ、よほどの支障がない限り、個人の選択の自由があるから、龍兵のこだわりは何も悪いことではない。しかも、昔流儀のやり方によって抜群の成績をあげているのなら、文句をつける必要がないのは当然。しかし、寮生活となる高校へ進学したいと希望する中3の長女あゆみ（北乃きい）に対して、「家族はひとつ屋根の下で暮らすべきだ！」と頭ごなしに断言して聞

く耳をもたないというのは、単なる親の価値観の押しつけでナンセンス。いくら山の稜線を抱く風光明媚な千葉県房総町という田舎町であっても、今ドキ、娘に対してそんな押しつけがまかり通ると思ったら大まちがい！ まして海江田家は、母親の泉（大塚寧々）が2年前に亡くなっているのだから、多感な年頃の中3の娘に対する進路指導が難しいのは当然。これでは先が思いやられると思っていると、案の定……。

担任……？ それとも担任代理……？

近時の悪しき社会現象であるモンスター・ペアレンツにも困ったものだが、「でもしか先生」や臨時教師の責任感のなさにも困ったもの。あゆみの担任は若い塚原奈桜子（原沙知絵）だが、彼女は1年間限定の臨時教師だから、正確には担任ではなく担任代理だそうだ。そのため（?）、あゆみから真剣に進路についての悩みを打ち明けられても、まともに相談に乗らず、「自分の人生でしょ、自分で決めなさい」と突き放すのはいかなもの……？ もっとも、「自分の将来も決められずに悩んでいるのだから、生徒の進路の悩みまで解決できるわけないでしょう」という言葉にも妙に説得力があるから、やりにくい……？

しかし、担任かそれとも担任代理かによってそんなに進路指導のレベルが異なるのなら、それは教育の平等を謳っている憲法違反……？

こんな映画は、脇役が大切！

主役が頼りない時は脇役が大切。そこまでハッキリ言ってしまうと失礼だが、この映画では死亡した龍兵の父親と漁師仲間だった番（竹中直人）や、龍兵が定期便として（?）羽田薫（谷啓）からの手紙を届けている老人三ツ屋輝夫（犬塚弘）、さらに泉の母木下園子（野際陽子）などの脇役が、それぞれ存在感を示している。

とりわけ番は例によって多少オーバーアクション気味（?）だが、豪放磊落な海の男らしい龍兵へのアドバイスが大いに役立っていることはまちがいない。また、泉の3回忌を契機に泉の形見分けをすると宣言する龍兵に反発するあゆみに対して、「あるもの」を見せることによって大きな教育効果をあげるのが園子。龍兵が奈桜子と怪しげな関係になっているのでは？ とあゆみが疑ったのは、あの年頃特有の大きな誤解だが、下手をするとこじれてしまうそんなあゆみと龍兵との関係をきっちりつつなぎとめることができたのは、そんな脇役たちの力のおかげ。映画の後半、温かい気持

が次第に広がっていくから、長嶋一茂主演のこの映画も意外な感動作！

「16年間の手紙」の価値は……？

学生運動をやっていた私たちの大学時代に推薦されていた文献の1つが、宮本顕治の獄中下往復書簡集『12年の手紙』。これは、獄中にある宮本顕治がプロレタリア文学の女流作家であり、夫婦関係にある宮本百合子との間で、1934年から日本敗戦に至る1945年までの12年間の書簡集。

恋愛時代にラブレターを書いた経験は多くの人があるはずだが、何十通にもなるラブレターを今でも大切に保管している人は意外と少ないのでは……？ 龍兵が泉に宛てて書いたラブレターと、泉からその都度戻ってきたラブレターは、何と16年間にわたって続けられていたらしい。なぜそれを園子が保管しているのかはよくわからないが、それはともかく、父親と母親の16年間にわたるラブレターを読めば、龍兵が泉に対する気持を忘れてしまうはずなどないことはすぐにわかるはず。つまり、この手紙の読破によって、たちまちあゆみの心は平穏になったばかりか、それまで1度も行ったことのない泉のお墓へも1人で行く気持になったわけだ。

さらに、能力的にはあゆみは料理のうまい母親の血を受け継いでいるのだから、父親のつくるまずい料理よりあゆみの料理の方がおいしいに決まっている。したがって、映画後半に訪れるクライマックスではあゆみが父親にお弁当を手渡すことになるのだが、その感動的なシーンはあなた自身の目で……。

千葉から神奈川までバタンコで……

『胡同（フートン）の理髪師』（06年）でも、ある日理髪の出張に行くと、寝たきり老人が死亡していたというシーンが登場したが、『ポストマン』でも、いつものように龍兵が三ツ屋宅へ羽田からの手紙を配達しにいったところ、三ツ屋の姿が見えない。不審に思った龍兵が家の中を覗いてみると、倒れている三ツ屋の姿が。病院に担ぎ込まれた三ツ屋のポケットの中にあったのは、羽田宛の手紙。

それを看護師から手渡された龍兵は、三ツ屋が「手紙が届くのは元気な証拠」と言っていた言葉を思い出し、何とかこれを配達しなければと決心したが、その送り先は千葉県ではなく神奈川県。「この手紙を待っている相手がいる」「この手紙を届ければ、絶対に助かる」。そう信じた龍兵はバタンコに乗り、東海道をひた走り、新幹線と競



©2008『ポストマン』製作委員会

争しながら羽田宅へ向かうことに。カメラが追うのは、必死でバタンコをこぐ長嶋一茂の姿だが、東海道新幹線とバタンコが並んで走るというシーンに使ったのは、普通のバタンコではなくスーパーバタンコとのこと。こんな無茶苦茶なシーンの撮影を可能にしたのは、今なお体力抜群の俳優長嶋一茂のおかげ……。

第4章

ひとつとして同じ人生などない

🎬 ハッピーエンドの姿は……？

こんな教育的で感動的な映画は当然ハッピーエンドと決まっている。その姿は第1に、海江田家で今にも綻びをみせそうだった龍兵とあゆみとの関係が完全に修復し、あゆみの進路もバッチリと決まった(?)こと。それをスクリーン上で表現するのは、泉のお墓にあゆみ手づくりの弁当を持って訪れた龍兵が、お墓を抱きながら泣き崩れるシーン。これはもちろん感激、感動の涙だから、見ていてすがすがしいもの。

もう1つのハッピーエンドは、奈桜子が教師として頑張ると決心したこと。そりゃ、こんな感動的な人生ドラマを間近に見たり、参加したりすれば、教師っていいもんだと納得したのは当たり前。その他、龍兵のおかげで病院に担ぎ込まれた三ツ屋も今は元気となった。したがって、これにて手紙がつなぐ家族の絆、人間の絆というテーマはすべてがハッピーエンドとなり、無事終了することになったが、さてあなたの感動の涙の量は……？

2008(平成20)年2月16日記